

感染症の流行中は誰もが色々なものを数えてばかりいる（中略）
僕たちは感染者と回復者を数え、死者を数え、入院者と学校に行けなかつた朝を数え、株価の暴落で失われた莫大な金額を数え、マスクの販売枚数を数え、ウイルス検査の結果が出るまでの残り時間を数え、集団感染発生地からの距離を数え、キャンセルされたホテルの部屋数を数え、自分と関係のある人々を数え、自分があきらめた物事を数える。そしてひとつ、幾度も幾

「もういくつ寝ると♪」で始まるあの童謡のように、幼い頃は、待ちわびたイベント当日を指折り楽しみに数え過ごしたものだ。それがこの頃は「あと何日残っているかな…」という焦りと苦心に苛まれたカウントダウンばかり。
そう、締切りだ。もちろん、しっかりと守り通すことができれば、区切りならぬ「苦切り」の解放感を味わうこともできるけれど、油断していると新たな締切りが容赦なく迫つてくる。この原稿を書いている今もまさにタイムリミットを数える日々の真っ只中だ。

イタリアの小説家パオロ・ジョルダーノ氏は「日々を数える」（『コロナの時代の僕ら』収録）というエッセイで、旧約聖書の詩編にある「われらにおのが日を数えることを教えて、知恵の心を得させてください」という聖句をあげて次のように綴つている。

工藤量導

何回だってやり直す
悲しみなんて川に捨てる
本当は内ポケットに仕舞つたままだ
仕様が無いから連れて歩く

（イースタンユース「矯正視力〇・6」より）

ゆく風

微

風

吹

動

日々を数える所作

かみ取り、日々を意義あるものへ昇華せねばならない。

と大上段に構えて考えを馳せてみると、その途方もなさについ怖れおののいてしまう。割り切れない喜怒哀楽の感情と捨て切れない執着心が渦巻く私のような方向音痴では、きっと進むべき方向に迷い、歩み始める勇気さえ見失ってしまうだろう。もう少しスケールダウンし、自身の弱さや情けなさと共に生きる道も必要なのだ。

そうして私たちが日々を小さく仕切り直し、前を向き、踏み出せるようになみだして頂いた所作が、掌を合わせ、祈りを込めて仏のみ名を十回数える「十念」ではないかと思う。失敗し、やり直すことの大前提として日々に何度も悔い数え、いつかは今世・来世の区切りをつかさどって悲しみに寄り添う、光と命に祝福された聖なる反復句である。仏は数限りない懺悔の呼びかけに応答を重ね、苦悪を瞬く間に断切し、智慧の道をまっすぐに歩ませてくれるのだ。

「何回だって数え直す」。十を数えるあの瞬間、あなたは何を考えるだろうか。私も振り切ったはずの後悔の念がまだポケット内に幾ばくか仕舞われたままだ。それでも良い、前に進めよ、と背を押してくれている気がする。ついに苦切りの时限がやつてきたのだ。

往生？いやいや人生の締切りはもう少し先。ひとまず脱稿、すなわち諦めを祈るカウントテンが始まったところだ。

合掌十念

度も、何よりも繰り返し数える日数がある。危機が過ぎ去るまでにいつたいあと何日あるのか、だ。

わずか数ヶ月前の緊張に満ちたあの日々の空氣感を、「数える」というごく当たり前の日常的な題材で切り取った名文だ。続けて、でも、僕はこんな風に思う。詩編はみんなにそれとは別の数を数えるように勧めているのではないだろうか。われらにおのが日を数えることを教えて、日々を価値あるものにさせてください——あれはそういう祈りなのではないだろうか。（中略）日々を数え、知恵の心を得よう。この大きな苦しみが無意味に過ぎ去ることを許してはいけない。

という。苦痛な日々を数え過ごすことを、可能なかぎり意義あるものに転化しようという強い意志。そこには神に与えられた試練を乗り越えんとするキリスト教の信仰という土壤もあるのだろう。ともあれ「日々を数え、知恵を得る」という訓戒が心をゆさぶる。

他方、仏教的な文脈で考えてみると、人生とは生老病死の苦そのものであり、煩惱を断尽してこそ「智慧」が得られる。敬虔な仏教徒としては本来、生まれ変わり死に変わりを延々と繰り返した輪廻無窮の時間と重ねた罪業の計り知れない量をひたすらに数えあげて、その事実と真摯に向き合い、身を浄め、心を定めて、智慧をつ